

写真師 島 霞谷

中西 淳 朗

慶応四年閏四月十八日、横浜野毛山の修文館に、東征軍の軍陣病院を開設せしめたウイリアム・ウイリスは、身長一九二センチ、体重一二七キロの巨体であるにも拘わらず、地味で朴訥である点を面白がられて、ワーグマンのポンチ絵のモデルにされたりしたためか、横浜で撮影したと云われる彼の写真は未だ見たことがない。

平成八年十月に千葉県松戸市戸定歴史館で開かれた「幕末幻の油絵師・島霞谷」展に際し、同館が編集した展覧カタログ中に、外国人と銘うった一枚の写真を小生が発見し、大滝紀雄、蒲原宏両先生の鑑定によってウイリアム・ウイリスの肖像写真と確定した。

この写真は本誌前号の表紙図版に登場させていたのだ。これに似た写真が『医学近代化と来日外国人』の五

十四頁にのっている。これに関する蒲原宏先生の解説によると、越後高田の瀬尾玄弘医師が明治三年八月二日(太陽暦)に上京した際、旧師のウイリスから直接手渡された写真で、瀬尾家に今日まで伝来したという。

このウイリスの二枚の写真をみると服装は同一であるが、カメラの位置が少々異なることに気づいた。即ち、同一日の撮影であり、撮影者はまづ島霞谷以外は考えられないので、ウイリスと島霞谷との接点を資料の中から探ることを試みたので報告する。

a. 島霞谷の経歴について

島霞谷は文政六年(一八二七)に下野栃木町の商家に生れた。幼名は玉之助らしい。

長ずるに及んで絵画を良くし嘉永年間には椿椿山に学び、文久以前に写真術を知り妻の隆と共に之を学ぶ。さらに油絵を学ぼうと幕府開成所に入るため、親族の幕臣寺沢儼之丞の弟として入籍してもらい、慶応三年八月十九日、開成校絵図調出役として雇用された。

同年九月二十三日、開成所内で徳川茂栄(一橋大納言・

松平容保の兄)と化学教師のオランダ人ハラタマを撮影し

ている。その半年後より一橋家に入入りし始め、明治元年十一月十五日から一代限りの家来となり、島仁三郎と改名した。同年十二月二十五日、地図御用出役となる。

明治二年正月頃より徳川茂栄に写真術を教授。同年十月に大学東校中写生字となり、解剖図をかいたり、頭蓋骨の写真撮影をしたり、活版印刷活字（東校活字）を完成させたりした。明治三年十月三十一日、熱病で死去。享年四十三才。

b・ウイリスの動向

ウイリアム・ウイリスが北越戦線より横浜へ帰還したのは明治元年十一月十五日（以下も陰暦）である。同月二十八日、アーネスト・サトウ、W・ウイリス、B・G・シッドールは協議の末、東京へウイリスを向けシッドールを横浜へ引きもどすと決めた。

すると十二月十三日、薩摩藩土石神良策を使者として、新政府よりウイリスに、一年間休暇をとって医学学校の教授をつとめてはどうかという打診があった。ウイリスは翌明治二年一月十九日より東京医学学校への出講をはじめた。その年の三月二日、ウイリス、医学学校兼病院に正式

採用される。一年間の保障つきで校長格であった。同年三月二日、ウイリスは三十二才の誕生日を迎えた。

C・霞谷とウイリスの接点

W・ウイリスが東京医学学校兼病院に正式に採用された頃、島霞谷は開成校に入入りしながら、一橋家のお抱え写真師として活躍していた。そして未だ大学東校になつていなかった医学学校へも顔を出した可能性がある。

越後高田の瀬尾玄弘医師にウイリスから別の写真が手渡されたのが、陰暦の明治二年六月二十五日であるから撮影はそれ以前であり、ウイリスと霞谷が顔をあわせた機会はこの年の春以降と思われる。新発見になるウイリスの写真は、東京医学学校就職と誕生日とを記念したもののようで、それを霞谷が自分用に複写して保存していたと考えられる。

（神奈川県地方会）